



巻 頭 言

水 田 の 雑 草 防 除

財団法人 日本植物調節剤研究協会 専務理事 小澤啓男

五月も半ばを過ぎ、緑が一気に深みを増し、身近にある水田にも初々しい若苗が植えられて、人の目にやさしい緑の季節となった。

ところが、今年の春はどこかおかしい。時期はずれの寒気と蒸し暑さが交互するような日変化の激しい気候が続く、いろいろな面で多くの異常が感じられる。農家はこの自然を相手に戸惑いながらも作物を蒔き育て栽培しなくてはならない。

近年は機械の利用もすすみ、月を背にして耕す、ようなことはなくなったが、高齢化が進み家族労働が余り期待できない農家にとっては、猫の手も借りたい日が続く。農業の現場では農家自身の身体と精神が全ての基本となる。自然の変化に応じてある時は肉体で、またある時は適切な判断力で突破しなくてはならない。思い通りにならない天候を恨んでも始まらない。自然の力の恐ろしさと偉大さを認めながら、これと上手につき合っていかなければならないのである。

かつて、水稻栽培において雑草の除去は極めて困難な作業であった。これに恩恵をもたらしたのが除草剤である。早いもので最初の水田除草剤が普及してからほどなく半世紀を迎える。それと共に、炎天下に水田の中を四つん這いになって、手の指と爪を熊手代わりにして田の草を掻き取ったあの苦勞を知っている人達も段々少なくなっていく。経験のない人達にこの苦勞を説いても始まらないと思う。体験し、除草剤の価値を知っている人達こそが、除草剤本来の使命と使い方を正しく継承させる義務があると思う。

忙しい日々が続くなかで、除草剤の処理はもう少し先に伸ばしたい。農作業の重なる時期を外してゆっくり散布したいなどの気持ちは判らないでもない。しかし、雑草は待ってはくれない。すでに言い古された言葉であるが、先人は「草を見ずして……」と防除を雑草に追われないように戒めた。水田雑草防除の基本は初期防除にある。除草剤散布作業の時間を意識的に無理してでも作って欲しい。人間の感ずる時間は考え方によっては変わるものである。全く同じ時間でありながら年を取るほどに時の経つのを早く感じてしまう。気の持ち様で時間感覚は変わる証左であろう。除草剤処理のタイミングは一種の「間」と言っても良いだろう。ただ、撒くだけと言えはそれまでであるが、割り振り、順序、水の具合、水稻の状態、雑草、天候状況など総合的に判断して、除草剤のない頃の多勞で辛い手取り除草を思い浮かべながら、適期という「間」の取り方を経験者が心に余裕を持って率先して頂きたいものである。

幸い、極めて短時間で散布でき「間」の取り易い水田除草剤が普及してきている。とくに、ジャンボ剤は評判がいい。この評判も単なるうわさであってはならない。その内容を以て是非をきっちり評価されなければならない。長年の努力を無に返さないためにも、関係者の結集が必要であり、使用する農家も無駄のない除草剤使用に向け、もう一度原点に戻って、真摯な気持ちで水田の雑草防除に取り組んでもらいたいと思う昨今である。